島原大変

白石一郎

文春文庫

文春文庫

島原大変

定価はカバーに
表示してあります

1989年2月10日　第1刷

著　者　白石一郎
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan
ISBN4-16-737004-2

文庫

島原大変

白石一郎

文藝春秋

島原大変／目次

島原大変　7
ひとうま譚　107
凡将譚　157
海賊たちの城　207
解説　西木正明　284

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

島原大変

単行本　昭和60年4月文藝春秋刊

島原大変

一

雲仙岳の頂上から満々と白帆を張った千石船が有明海をめざして舞い降りてくるという噂が立った。千石船は一艘だという者もあれば三艘が一列に並んで空中を静かに飛んでくるという者もある。この眼で見たと触れ歩く男や女もいた。

雲仙岳というのは肥前南高来郡島原半島のほぼ中央に聳え立つ火山群である。中腹のところどころに温泉が湧き出ていて、むかしは温泉岳とも呼ばれた。

海抜四千尺をこえる火山群の東と北、南の三方の山裾がそのまま海へ入って島原半島を形づくっている。山々の中でも他を圧して屹立しているのが妙見岳、国見岳、普賢岳の三峰で、この三つはほぼ肩を並べる高さだが、いちばん高い峰は海抜四千百尺をやや越える普賢岳だといわれていた。もっとも人によっては国見岳が高いという者もあり、ときどきおこなわれる実測でもそのたびに両者の高さが違っていて、本当のところはよく知れないのである。

島原に住む人々は普賢岳を最高峰と信じており、これを「奥山」と呼んでいた。

奥山に対比して「前山」がある。

前山は二千五百尺、普賢岳の東方に位置しており、山麓には肥前島原藩七万石の城下町があっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

た。こぢんまりとして陽射しも麗らかな南国の町である。島原城を中心に武家屋敷、商家町、職人町、漁師町などが有明海に面する海岸沿いに並んでいた。

山裾が急傾斜で有明海に突入している前山は、城下町島原の名物でもある。

町の人々は朝な夕な前山を仰ぎ見た。前山には鋭く尖った南北二つの峰があり、北方のそれを七面山、南山の峰を天狗山という。

夜明けや夕焼けの陽光が二つの峰を強烈に照らすとき、七面山と天狗山は互いに肩を怒らせて睨み合っているように見えた。

双方の峰を合わせて島原の人々は方言で「まんやま」と呼ぶ。文雅を気どる武士などは「眉山」と書いたりするのだった。

うわさでは雲仙岳から舞い降りる白帆船は日暮れどきごろ普賢岳の頂きに忽然と姿をあらわし、舳先を東方へ向けて前山の上をかすめ飛び、黄昏の有明海へしずしずと舞い降り、対岸の肥後のほうへと宵闇に姿を消してゆくという。

もっともこの噂は武家の間にはあまり知られず、もっぱら町家でささやかれた。

島原藩御抱え医師の小鹿野一伯はこれを丹官（たんかん）小路の遊女屋で聞いたのである。

丹官小路は城の大手門から南へ離れた港ふきんにあって、水頭（みずがしら）と呼ばれる大小の商船の船溜りに近かった。

島原は有明海周辺の産物を大坂や江戸へ送るための中継地であり、肥後や筑後、肥前の各地から夥しい商船が集まってくる。

丹官小路の遊女屋はそれら商船の船乗りたちのために設けられたものだ。

ほんらい島原藩の武士たちは夜歩きを禁じられていて、遊女屋へは行けない。

しかし徳川家中でも最も古参の譜代大名である松平家には万事のんびりとした雰囲気があって、家中の侍たちの隠れ遊びなどを敢えて咎め立てする者は少なかった。

御抱え医師とはいえ定員外の藩医であり、家中にさして遠慮もいらぬ小鹿野一伯などは、独り暮しの必要から月に一、二度は丹官小路で捌け口を求めている。

馴染みの遊女がいた。二年前、一伯が長崎からここへ帰ってきて、はじめて遊女屋の暖簾をくぐったとき、遣り手にすすめられて買った妓だ。

「初見世の妓がおりますと。まだ十六歳の未通女でね。売られてきたばかりですとよ。買うて損はなか。ほんとですよ」

一伯は騙されるつもりで妓を買ったのだが、もちろん未通女ではなかった。しかし売られてきたばかりというのは本当らしく、客をもてなす仕種がぎこちなく、床入りしたあともふるえたりしていて、もし一伯が医師でなかったら、未通女だと思い込んでしまったろう。

小鹿野一伯はこの女のいつ迄も客扱いに馴れぬ素朴さと無口なところが気に入って、以来、名指しで通うようになった。

その日、小鹿野一伯は夜更けに患家へ招かれての帰り道、ふと思い立って丹官小路へ行ったのである。正月もようやく半ばをすぎた十八日の夜の四ツ（十時）ごろだった。

小菊という名の妓はその夜はお茶を挽いていて、一伯は遣り手に大いに歓迎され、夜も更けていたので珍しく泊ることにした。ふだんは時間遊びで帰ることが多い。

半刻（一時間）ほど妓と二人で酒を飲み、あとは一向に床馴れしない不器用な妓をいたぶるように楽しんで眠ってしまった。

眼ざめたのは大音響におどろいたからだ。はじめは落雷かと思った。天井が櫓漕ぎ船のように

軋み、寝ている一伯と妓の軀が上下左右に揺れ動いた。
小座敷の隅の姫鏡台が跳ね上っている。床の間の掛け軸が落ち、花瓶が音立てて転げ落ち、寝床の枕もとにめぐらした二面の衝立屏風が二人の顔の上に倒れてきた。
ひっと悲鳴をあげてしがみついてくる妓の腕をふりほどき、一伯は飛び起きると倒れた衝立屏風に掛けていた衣服を取って着替えようとした。立っておれない。
再び百雷を落すにも似た大音響がして、ぐらぐらっと家が揺れ、襖障子が敷居から外れて前後へ倒れた。天井から木切れと埃が舞い降りてくる。
山鳴りの音だと気づいたのは、爆雷のような音響がしだいに遠ざかり、小さく聞えはじめたときである。音は雲仙岳の方角から東へ、海の方へ向って鳴り渡り、有明海から谺(こだま)するように揺り返して、雲仙岳の方へ鳴り登るように聞えた。
激震がやんだころ、戸外へ飛び出した人々のさわぎ声がようやく耳に入ってきた。
一伯が衣服を身にまとっている間に、小菊は小座敷から廊下へ走り出ていた。小鹿野一伯は、家具や調度が散乱した座敷の中で、しばらくは腕組みして坐り込んでいた。男女が群れてさわぎ立てている戸外に、いま出ていくわけにはゆかない。
(それにしても……)
一伯は首をかしげて考えた。昨年の十月ごろから地震が絶えない。一日に三度や四度の小さな地揺れは珍しくなく、今ではみんなが馴れっこになっている。山鳴り地鳴りはいつものことだった。
昨年十一月には雲仙岳の西の山麓で地震のための山崩れがおこり、櫨(はぜ)の木の番小屋にいた老夫婦が圧死するという事件もあった。

寛政四年の正月が明けてからも雲仙岳の山々が鳴動し、まるでオランダ船が大砲を撃つような音がしばしば聞えた。

それにしても、今度の揺れは只事ではない。雲仙岳の噴火の予兆ではないのか、とかねがね一伯は思っていた。藩の要職につく人たちにそれとなく注意を促したこともある。しかし取り合ってくれなかった。

「噴火ならば天の定めじゃ。とりやめろとわしらが山々に命ずるわけにもゆくまいて」

といった家老職もおり、郡奉行の職につく男などは、一伯の話を聞くと、

「噴火？　それならば有難いことだ。火山の灰や温泉泥は諸作のこやしになるそうではないか。凶作がつづいて財政困難の折からどんどん景気よく噴いてもらいたいものだ」

かえって喜んでいる始末だった。

一伯はそれを聞いてばかばかしくなり、度重なる地震にもいっさい口を挟まないことにした。

小菊は半刻ちかくも一伯を放って置いて、座敷へ戻ってきた。

「安徳村や中木場村がいちばんひどく揺れたそうです。奥山から千石船が飛んでくるという噂は、ひょっとして悪かことの前触れではなかろうか、とみんながいっていました」

「千石船？」

一伯ははじめて白帆船が雲仙岳から舞い降りてくるという巷のうわさを聞いたのである。

「みんな知っとりますとよ。とくに漁師たちは奥山の神さまが海へ降りてきなさるといって、喜んでいたとです。ほんとに見た人が何人もいるらしかですよ」

一伯は苦笑して聞きながら、外の気配に耳をすまし、そろそろいい頃だろうと立ち上った。

「あら、お泊りではなかとですか」

「帰るよ」
女に送られて玄関へ出ると、掛行燈のほの暗い火に照らされた帳場の前の上り框に一人の男が腰かけていて、小菊を見るなり、「おみつ」と呼びかけ、腰を上げた。
「大丈夫じゃったか」
小菊はおどろいた顔で廊下に立ちすくんだ。
「お前が心配になって駈けてきた。村ではお城下が総崩れになったと噂しとる」
「あんた、安徳村からここまで」
男は小菊にはこたえず一伯のほうを睨みつけた。その態度や鋭い視線が尋常ではなく、ならず者らしいと察して小鹿野一伯は男の視線をかわし、暖簾をくぐって外へ出た。背後から妓が声をかけてくるのを聞き流して、夜道を歩きはじめる。
「おみつというのか」
小菊の本名だろうと思った。

二

ようやくまどろみはじめて間もないころ、小鹿野一伯は下男の三蔵の声で起された。
「お城からお迎えの方が来とられます。殿さまのお具合がわるかそうで」
一伯は眼をこすりながら起き、
「何刻ごろか」ときいた。
明け六ツの鐘が鳴ったばかりだという。今は正月だから卯の刻（午前六時）ごろであろう。月によって鐘の鳴る時刻はちがう。

遊女屋から帰ったもののすぐには眠れず、絶えず聞える山鳴りの音に耳を傾けていた。二、三度、小さな余震もあった。

迎えの小姓を玄関先に待たせて一伯は薬簞笥の小引出しから用意してある丸薬を取り出し、一粒ずつを紙に包んだ。甘草、酸棗仁、良薑、大黄、桂皮、茴香などを粉末にして練り合わせた丸薬で、一伯が藩主のために調合したものだ。

ほかに一伯は甘草と大棗、大麦粉を取り出し、三蔵に命じて台所で急いで煎じさせ、薬湯用の瓢の中へ詰めた。

小姓に聞くまでもなく藩主の病気はわかっていた。本人は癪気だと思いこみ、譜代の藩医らもそう診立てているが、一伯の診たところ間違いなく留飲である。それも藩主の性格からきた慢性留飲で、ふだん弱っている胃腸がちょっとした驚きや心配ごとで癪気とそっくりなさしこみや痛みを誘発する。

丸薬は留飲を押えるためだが、薬湯のほうは違う。これは一伯が試みに使ってみて著しい薬効におどろき、中味は絶対に人に明さないことにしていた。

藩主の名聞にもかかわるからだ。

着替えをすませると一伯は薬箱を持った三蔵を従え、迎えの小姓と肩を並べて島原城へ向った。

この城は島原の乱の引き金の役を果した松倉重政が寛永二年に築いた周囲二千間の長方形の城構えで、なかは堀で区切られて内郭と外郭に分れている。

内郭に五層の天守閣を中心とする本丸があり、北へ二ノ丸、三ノ丸とそれぞれ堀を距てて並んでいた。

外郭はおもに家中の侍たちの屋敷で占められている。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com